

Ch. 21

Just following orders: A shocking demonstration of obedience to authority.

ただ従っただけ：権威への服従の衝撃的実演

In Abelson, R. P., Frey, K. P. and Gregg, A. P. (Eds.) *Experiments with people. Revelations from social psychology*. Lawrence Erlbaum Associates.

元論文 Milgram, S. (1963) The behavioral study of obedience. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 371-378.

Rep. 小森めぐみ.

BACKGROUND

- ❖ 服従とは、誰かから命令されて何かをすること。社会をスムーズに機能させたり、上下関係を必要とするより大規模な目標達成に寄与する一方、不正な法律への服従は悲劇につながる
 - 例えば、ベトナム戦争時に起きたミライ村での無差別大量殺人、1978年の人民寺院での大量自殺、1993年の宗教集団ブランチ・ダヴィディアン¹の籠城事件¹
- ❖ “人類の長く輝かしい歴史をふりかえってみると、反乱という名の下に行われたよりもはるかに多くの、はるかにおぞましい犯罪が、服従という名の下に行われてきたのである” (Snow, 1961)

- ❖ Stanley Milgram(1963)は zeitgeist (時代精神) や ortgeist (地域精神) に敏感な社会心理学者の一人として、ニュルンベルク裁判に興味をもち、その中でも Adolf Eichmann という人物に注目した
 - Adolf Eichmann : ナチスドイツでユダヤ人大量虐殺計画を立案した。自分はただ命令に従っただけだという言い訳を裁判で繰り返した
- ❖ Milgram は、大戦時の大量虐殺が命令に服従した大勢の一般人によって執行されたことを指摘
 - ☆ **人はどの程度権威に服従するものなのか、また、それを激化・緩和する要因は何か？**
 - Milgram は当初権威への服従は文化で説明できると考え、服従を操作可能な形にして、エール大学近郊の成人を対象に研究をはじめた。これはドイツ人との比較に使用するベースラインとなるはずだったが...

WHAT HE DID

実験参加者 最初に発表された研究の参加者²は 20~50 歳のあらゆる階層の男性 40 名。\$4. 50 の報酬で実験に参加。一つのセッションには被験者とサクラと実験者が参加。

手続

実験は罰と学習の関係を調べるものと伝えられた。参加者とサクラは偽のくじ引きでそれぞれ教師役と生徒役に割り当てられた。

¹ アメリカのテキサス州ウェイコで 1993 年に起きた籠城事件。最終戦争がおきるという教義を説く David Koresh (1959 年テキサス州生まれ) を指導者とする、再臨派集団ブランチ・ダヴィディアン (Branch Davidian) 本部へ連邦アルコール煙草火器取締局が強制捜査に入ったことを契機に、銃撃事件が発生し、およそ 2 カ月の籠城の果てに 80 名以上の信者が死亡した。

²最終的には 1000 名以上の被験者が参加し、基本的な結果のほかに、調整要因や境界条件などが明らかになった。

生徒役 (サクラ) “不適切な行動や脱出を防ぐため”腕を椅子にくくりつけられた。生徒役の手首には“火傷等を防ぐための”軟膏がぬられ、電極がつながれた。電極のもう片方は別の部屋にある送電器につながっていた。生徒役は不安を口にするが、実験者は“電気ショックは痛みを伴うが、永続的な損傷は残さない”と答える。教師役=本当の被験者は、やりとりを全て傍らで見聞きしていた。

教師役 (被験者) 隣の部屋にいる生徒役に、単語ペアの暗記課題を実施した。誤答の場合は送電器を操作して電気ショックを送った。

送電器 電流の強さの異なる 30 個のレバー (15~450 ボルト) がついており、どれかのスイッチが押されると、ランプが点灯して音が鳴り、電流のメーターが右に触れるようになっていた。被験者は試しに 45 ボルトの電流を流され、電気ショックが強烈であることを身をもって知った。電気ショックは 15 ボルトから初め、誤答のたびに一段階ずつ電流の強さをあげていくよう求められた。

課題 教師役が複数の単語のペアを読み上げ (例. 青い—空)、それを覚えさせる。その後単語ペアの片方を読み上げ、対応する単語を四つの候補から選ばせた (例. 青い—インク、空、箱、ランプ)。生徒の正答率はおよそ 25%で、電流が 300 ボルトになると、壁にぶつかった音をたて、反応しなくなる。実験者は無反応は誤答として、電気ショックを送るよう教師役に要請。最大のショックを二度与えたところで、実験は終了。

実験者の要請 教師役の質問に対しては、以下の勧告を順番に用いて答えた。

- ①「おつづけください。」②「実験のために、あなたが続けることが必要です。」
- ③「あなたが続けることが絶対に不可欠です。」④「迷うことはありません。続けるべきです。」

勧告④を用いても教師役が電気ショックを送ることを拒めば、それを不服従として、実験は終了。

従属測定 主な従属測定は、教師が最後に送った電気ショックの強さ

その後 一連の実験が終了すると、参加者は自由回答の質問やインクプロット課題、自分の教師としての役割についての態度尺度に回答。その後、注意深いデブリーフィングが行われた。

WHAT HE FOUND

行動予測の結果と実際の結果

- ❖ 大学の同僚や学生が、どのくらいの割合の被験者が、生徒役に最も強い電流を流すか推測した
 - ほとんどの人の答えは、“非常に強いショック”まで流す人は稀で、ごく少数 (0~3%) の人だけが最大限までいくだろうというものだった³。
- ❖ 実際は、300 ボルトで生徒が壁にぶつかるまで、全員が電気ショックを送り続けた。その時点で 5 名が実験を拒否した。その後、315 ボルトで 4 名、330 ボルトで 2 名、345、360、375 ボルトで各 1 名が途中で実験を拒否した。残り 26 名=65%は、最大の電気ショックを生徒に送った。

³ エール大学近郊の医学学校の精神科医 40 名の答えも類似 (最大限のショックを送るのは 1%未満)

- 実験の進行中、不快や恐れ、嫌気、憤慨を示す者も頻繁にいたが、平静さを保った者もいた。

その後の研究

- (実験 0 生徒役の抗議なし ⇒全員が最大電流を流してしまう)
- (実験 1 遠隔。教師と生徒は別の部屋で、生徒はボルトで壁を叩いて抗議⇒26/40 服従)
- 実験 2 発声。教師と生徒は別の部屋で、抗議は壁を通して聞こえる⇒25/40 服従
- 実験 3 近接。教師と生徒は同じ部屋で2~3 フィートの距離⇒16/40 服従
- 実験 4 接触。教師はいやがる生徒の腕を電極におしつけなくてはならない⇒12/40 服従
- 実験 5 心臓。生徒は心臓が弱いという設定。また、実験室を殺風景なところへ移動⇒26/40 服従
- 実験 6 職員の交替。実験者と生徒を別の人間に変更する⇒20/40 服従
- 実験 7 実験者不在。実験者は退室し、電話で参加者に命令する⇒9/40 服従
- 実験 8 女性。実験参加者を女性に変更する⇒26/40 服従
- 実験 9 前提条件。生徒は実験をやめたいときにやめる条件をとりつけて参加⇒16/40 服従
- 実験 10 実験室移転。大学実験室から大学の名を伏せた会社として実験実施⇒19/40 服従
- 実験 11 ショック選択。参加者が電気ショックの強さを選ぶ⇒1/40 服従
- 実験 12 生徒の要求。生徒がより強い電気ショックを自ら求める⇒0/20 服従
- 実験 13 一般人の命令。もう一人のサクラが参加者に実験者不在時に命令する⇒4/20 服従
- 実験 13a 被験者傍観。もう一人のサクラが教師役をやり、参加者は傍観⇒11/16 服従
- 実験 14 権威者=生徒。実験者が生徒になり、もう一人のサクラが実験者となる⇒0/20 服従
- 実験 15 矛盾な命令。二人の実験者の要求内容が矛盾する⇒0/20 服従
- 実験 16 役割分担。二人の権威の一人が生徒役、一人が実験者役をする⇒13/20 服従
- 実験 17 仲間の反逆。二人の教師役のサクラが送電を拒否⇒4/40 服従
- 実験 18 仲間の電撃。サクラが送電器を操作し、参加者は残りの仕事⇒37/40 服従

SO WHAT?

- ❖ Milgram の研究は学界だけでなく世界中に衝撃をもたらした。人間は邪な権威の下では簡単に残酷非道な行いに走ってしまう。この結果は人々の持つ“自分は絶対に Eichman たちのようにはならない”という自己満足に警鐘をならすもの
- ❖ われわれは、自分たちは自由意志をもっていて、状況の圧力に屈することは少ないと考えがちだが、Milgram の研究は状況が個人の行動に強力な影響を及ぼすことを指摘。これを受け入れることは難しいが、逆に認識することでそのような状況を防いだり、状況に抗えるようになる
- ❖ Milgram の実験は、様々な方法を用いて追試され、その度に類似の結果がでていく (e. g., Kilham & Mann, 1974; Meeus & Raaijmakers, 1995)

AFTERTHOUGHTS

服従実験からの二つのクエスチョン

- ① なぜ、参加者たちはあのような極端な要求に従ったのだろうか？【現象の説明への疑問】
- ② 彼の用いた手法は、極端すぎではなかっただろうか？【研究の倫理性への疑問】

現象の説明への疑問について

- ❖ Milgram の実験では状況的な調整要因は明らかになったが、心理的な媒介要因は未検討
 - 参加者たちは悪意に満ちていて、無慈悲だった？
 - ✧ 実験の進行中、参加者は明らかに悩み、苦しんでいた。神経質な笑いや過度な発汗、実験者への中止要求は、参加者が犠牲者に配慮していた証拠。この指摘は基本的帰属のエラー (Ross, 1977; see Chap. 23)のなせる業といえる
 - 服従の規範が働いていた？
 - ✧ 実験は服従規範（権威に従いなさい）と社会的責任規範（苦しんでいる人を助けなさい）が競合する状況。実験のセッティングや実験者の強制的な言葉が服従規範をより強調した
 - ローボールテクニック？フットインザドアテクニック？
 - ✧ 最初の微量の送電が特定の行為としてローボールされたか、コミットメントとして働き、後のより強い送電につながったとも考えられる。最初に行われた行為のゆるさや研究の価値、要求の激化が急激ではなく徐々にであったことなどが、無垢な参加者を非道なものに変えていった
 - 行為に権限が与えられていたから(authorized)？
 - ✧ Milgram 自身も代理状態(agentive state)という言葉を用いて現象を説明していた。参加者は課題の細部に注意をそらされ、自分がしていることの高次の意味を気にせず、単なる実験者の代理として器械を動かしていた(Vallacher & Wegner, 1987)。
- ❖ 上記の説明はどれも完全に現象を説明していないが、参加者の行為が状況からの強い影響を受けていたこと、Milgram が用いた操作は、日常生活の中で見られる権威と類似していることは確か

研究の倫理性への疑問について

- ❖ Milgram の実験はしばしば倫理面で問題とされるが、もっと酷い実験もあった
 - Landis(1924) 強い情動を表す表情を研究していたが、情動導出の手段は過激であった（例. 蛙の入った箱に手を入れる、強い電気ショックを与える、切れないナイフでラットを解剖させる）
- ❖ しかし、彼は参加者を丁寧に扱うと共に、他の研究よりも真摯に倫理面の批判に対応した
- ❖ 彼が実験の実施後に行った郵送調査では、参加者たちは実験に参加できてよかったと答え、85% 近くがまた実験に参加したいと答えていた。
- ❖ 精神科医の診断の結果、実験参加者に長期的な悪影響は見られなかった

- ❖ しかし、その後倫理基準を設定しようとする動きが高まり、正しい分析、最低限の欺瞞、無用な損害の回避、インフォームド・コンセント、丁寧なディブリーフィングなどが定められた

REVELATIONS

**状況のもつ力は、人びとをすすんで権威に従わせることができる。
そして、それによって人びとは最も邪悪で恐ろしい行為をとる場合がある。**